

# 全校配置期における公立中学校教員のスクールカウンセラー利用時の満足度と生徒のスクールカウンセラー認知との関連

橋本 和幸<sup>1)</sup>, 倉橋 朋子<sup>2)</sup>, 田中 理恵<sup>3)</sup>, 上野 道子<sup>4)</sup>

了徳寺大学・教養部<sup>1)</sup>

神奈川県臨床心理士会<sup>2)</sup>

秋田県立大学<sup>3)</sup>

神奈川県立総合教育センター<sup>4)</sup>

## 要旨

本研究は、公立中学校15校の教員367名と生徒482名を対象とした調査によって、教員のスクールカウンセラー（SC）利用時の満足度と生徒のSC認知との関連を検討した。この結果、教員のSC利用時の満足度と生徒のSCの勤務曜日の認知、相談室来室経験や相談経験とは、負の関連を示した。

キーワード：公立中学校、教員、中学生、スクールカウンセラー

## Relationship between use of school counselor by the teachers and school counselor recognition of the students in public junior high school

Kazuyuki Hashimoto<sup>1)</sup>, Tomoko Kurahashi<sup>2)</sup>, Rie Tanaka<sup>3)</sup>, Michiko Ueno<sup>4)</sup>

Center for Liberal Arts Education, Ryotokuji University<sup>1)</sup>

Kanagawa Society of Certified Clinical Psychologists<sup>2)</sup>

Akita Prefectural University<sup>3)</sup>

Kanagawa Prefectural Education Center<sup>4)</sup>

## Abstract

This study examined relationship between teachers' degree of satisfaction of the school counselor and students' recognition of the school counselor in public junior high schools consisting of 367 teachers and 482 students from 15 public junior high schools. Results indicated that students' know what days of the week their SC worked, their experience of visiting the counseling room and their experience of counseling had negative relationships to teachers' recommending the school counselor's services to students, their use of counseling, and the degree of satisfaction to them.

Keywords: public junior high school, teacher, junior high school student, school counselor

## I. 問題

### 1. 教員とSCとの連携

本研究では教員のスクールカウンセラー（以下、SCと略記）利用時の満足度と中学生のSC認知度との

関連を検討する。本研究におけるSC認知度は、SCの存在や役割を知っているということである。これは、木村<sup>1)</sup>が大学生を例に、学生本人が問題を自覚していなくても、教員など周囲の人間に勧められると来談することがあると指摘しているように、中学生がSCの存在や役割を認知して利用するためには、教員からの紹介が重要であると推測するからである。教員が生徒にSCを紹介することは、教員にとっては自分が担当する児童・生徒をSCに託すことである。このためには、SCは教員との間に十分な信頼関係を作っている必要がある。鶴養<sup>2)</sup>や吉澤・古橋<sup>3)</sup>が述べるように、信頼関係の形成には、自分がSCを利用して満足できたという経験が関わっているのではないかと考えられる。つまり、教員自身のSCを利用した結果が、児童・生徒にSCとの面接を勧めるか否かを決定するのではないかと考えられる。鶴養<sup>2)</sup>は、教員との良い関係づくりに関連する行動として、「日ごろからの会話」「会議出席」「学校行事への参加」と様々なレベルの行動を挙げているが、いずれもSCが「教員にとって、安心でき、信頼でき、必要な時にすぐに相談できる人」になるためのものとされている。

SCが配置された学校で児童・生徒との関わりを増やし、より効果的に児童・生徒の問題に対応するためには、教員との連携が重要になるという観点から、筆者らは以前公立中学校教員のSC利用状況と中学生のSC認知度との関連を調査した。この結果、次の3点が明らかになった<sup>4)</sup>。①生徒にSC利用を勧めた教員が多い学校では、SCの勤務曜日を知っている生徒は少なく、相談室に行ったことがある生徒も相談したことがある生徒も少なかった。②SCを利用した教員が多い学校では、SCの勤務曜日を知っている生徒は少なく、相談室来室経験と相談経験も少なかった。③生徒にSC利用を勧める割合と学校規模との関連は見られなかった。橋本ら<sup>4)</sup>では教員の利用と生徒の認知・利用の関係を調査したが、本研究では、教員とSCの連携を示す一つの指標として、教員のSC利用時の満足度を調べることにした。なお、本研究における「教員のSC利用時の満足度」とは、教員が生徒にSC利用を勧めた結果についての満足度と、教員自身がSCを利用した結果の満足度の2点である。

## 2. 教員にSC利用を勧められた生徒のSCへの認知

教員からSCの利用を勧められた生徒がどのようにとらえているかについては、例えば石川・橋本<sup>5)</sup>では、友人のSCへの援助要請態度が否定的であると思えるほど、自身の援助要請態度も否定的になっていた。相談援助は、自分が利用するよりも他者に勧める方が抵抗感は低く、当該の問題についての専門家から勧められたり、そのカウンセラーを良く知っている人から勧められたりした方が援助を受ける気持ちになるものと考えられる。このことから、生徒は、SCを肯定的に捉えている教員からSC利用を勧められると、SCを利用する可能性が高くなるのではないかと考えられる。

## 3. 学校要因の影響

教員のSC利用の満足度や中学生のSC認知度は、学校でのSCの位置づけられ方による影響も受けられると考えられる。例えば、中村・小玉・田上<sup>6)</sup>が述べるように、校長の積極性の有無や、校内の教育相談活動の中核となる教育相談担当教員や特別支援教育コーディネーターとして有能な人材が校内にいるかどうかなどによって、SCの活用の在り方は変わってくると考えられるからである。

また、学校の規模によって、その学校の教員のSC利用や満足度が変わる可能性が考えられる。学校規模とSCの活動の関連についての調査は見当たらないが、学校規模と生徒指導の関連については、新井<sup>7)</sup>では、小規模校ほど教員の負担が大きくなることを指摘していることから、学校規模によって教員のSC

利用の在り方が変わる可能性が考えられる。

そこで、本研究では、全校でほぼ均質なSC利用ができることを目指しているある一つの市を調査対象として、学校でのSCの位置づけを統制し、学校規模による違いを比較できるようにした。

## Ⅱ. 目的

上記のことを踏まえて、本研究では、公立中学校教員がSC利用時の満足度が、中学生のSC認知度や利用状況に関連があるかどうかを検討することを目的とした。具体的には、次の3点を検討した。

- ①教員が生徒にSC利用を勧めた際の満足度と生徒のSC利用や認知との関連
- ②教員自身のSC利用時の満足度と生徒のSC利用や認知との関連
- ③学校条件の影響について

## Ⅲ. 方法

### 1. 調査対象者

首都圏のX市の公立中学校全15校において、生徒については3年生の内の1クラスを対象に、教員は15校の全教員367名を対象に調査を行った。3年生の内の1クラスを対象としたのは、全学年やある学年の全クラスということは、学校事情により難しく、調査対象は学内のどこか1クラスという制約があったためである。3年生を選んだのは、1, 2年生に比べて教員やSCに接する期間が長いためである。調査対象となる教員には、調査対象クラスの担任以外も含まれるが、中学校は学年職員や教科担任もクラスに関わり、第3学年に所属していない教員でも、生徒指導担当や部活動の顧問、1, 2年次の時に教わった教員や養護教諭などからも一定の影響を受けているのではないかと考えられる。

なお、どの学校も3年1組を調査対象として指定することで、学校側の恣意性が入らないようにした。対象となった生徒は482名であった。

対象となった教員からは、367名全員から質問紙を回収することができた。

各校の規模を示すために、学校全体のクラス数と調査に協力した生徒数を表1にまとめた。

表1 各校のクラス数と調査協力者数

学校名	学校全体のクラス数	調査に協力した生徒数(名)	教員数(名)
X1	15	31	23
X2	9	36	18
X3	9	31	24
X4	20	31	33
X5	19	33	27
X6	12	38	38
X7	4	22	13
X8	19	35	29
X9	14	32	25
X10	11	30	21
X11	15	30	24
X12	14	36	25
X13	9	36	21
X14	8	26	20
X15	12	35	26

## 2. 調査時期

2004年11月.

## 3. 調査手続き

教員については、学校ごとに質問紙を配布し、調査対象者本人に個別に回答させた。生徒については、調査対象クラスで担任から調査対象者に配布し、回答させた。

## 4. 調査内容

生徒に対しては、X市の全中学校へのSC配置が完了して間もない時期であったため、まず生徒が自校のSCのことをどの程度知っていたり、接触した経験があったりするかを調査することを目指した(Q1,2)。そして、相談経験がどの程度あるかを調べようと考えた(Q3)。その上で、Q4～6で生徒のSCへの評価を探索しようと考えた。

生徒には、調査実施時に調査対象校の担当教員から、入学した時から現在までのSCについて回答するように口頭で教示してもらった。

Q1 SCは何曜日に来ているか知っていますか。（「はい」「いいえ」の2件法で回答）

Q2 SC室に行ったことがありますか。（「はい」「いいえ」の2件法で回答）

Q3 SCに相談したことがありますか。（「はい」「いいえ」の2件法で回答）

Q4 SCは学校にいた方がよいと思いますか。（「いたほうがいい」「どちらでもいい」「いなくてもいい」の3件法で回答）

Q5 SCがいてよかったことがある人は、もしよければどんなことを教えてください。（自由記述で回答）

Q6 SCについて何か意見があれば書いてください。（自由記述で回答）

教員に対しては、次の2つの質問を行った。なお、フェイスシートに「平成15年度～平成16年度現在までのことで御回答下さい。」と回答範囲を限定する教示を記載した。

Q1 SCの利用を生徒にすすめたことがありますか。（「ある」「ない」の2件法で回答）

→あるに○をされた方はどのような問題ですすすめましたか。また、その問題の解決に向けての満足度も併せてお答えください。それぞれの件数に応じて数字を記入してください。

Q1への回答は、「不登校」「いじめ」「友達・異性問題」「集団不適応」「情緒不安定」「家庭・親子関係」「非行」「反社会的行動」「軽度発達障害（ADHDやLDなど）」「学習」「生活態度」「精神疾患」「その他」という13種類の問題の中から、それぞれの問題に利用した件数とそれぞれの満足度を5件法（「満足」「やや満足」「どちらでもない」「やや不満足」「不満足」）で回答してもらった。

Q2 先生御自身がSCを利用したことはありますか。（「ある」「ない」の2件法で回答）

→あるに○をされた方はどのような問題ですすすめましたか。また、その問題の解決に向けての満足度も併せてお答えください。それぞれの件数に応じて数字を記入してください。

Q2への回答は、「不登校」「いじめ」「友達・異性問題」「集団不適応」「情緒不安定」「家庭・親子関係」「非行」「反社会的行動」「軽度発達障害（ADHDやLDなど）」「学習」「精神疾患」「問題の予防」「学級集団の育成」「他

機関の紹介「その他」という15種類の問題の中から、それぞれの問題に利用した件数とそれぞれの満足度を5件法（「満足」「やや満足」「どちらでもない」「やや不満足」「不満足」）で回答してもらった。

なお、本研究では、以上の満足度について分析する際に、各件についての満足度評定を教員ごとに平均して1つにまとめて、教員ごとの満足度得点を算出した。

## 5. 分析方法

教員向けの質問（Q1およびQ2）と、生徒向けの質問（Q1～Q6）の関連は、 $\chi^2$ 検定で分析した。その際に、IBM SPSS Statistics 20.0を用いた。

また、生徒への質問のうち、Q5とQ6が自由記述で回答を求めるものであった。この結果の処理については、回答をカードに転記して、いくつかのカテゴリに整理した（詳細は結果の「2. 生徒の自由記述回答について」に記述した）。

## IV. 結果

結果の1～3は、本研究の目的を分析するための予備的な分析である。4～6が本研究の目的で挙げた3点（①教員が生徒にSC利用を勧めた際の満足度と生徒のSC利用や認知との関連、②教員自身のSC利用時の満足度と生徒のSC利用や認知との関連、③学校条件の影響について）を検討するための分析である。

### 1. 学校別のSCを利用した満足度

教員が生徒にSC利用を勧めた際の満足度得点と、教員自身がSCを利用した場合の満足度得点を算出するため、教員への質問Q1およびQ2について、「満足」を5点、「やや満足」を4点、「どちらでもない」を3点、「やや不満足」を2点、「不満足」を1点と重み付けをした。

この結果、生徒に利用を勧めた場合の満足度得点の15校の教員全体の平均は3.86点(SD=0.87)であった。平均超の学校が7校、平均未満の学校が8校であった（表2参照）。

次に、教員自身が利用した場合の満足度得点の15校の教員全体の平均は4.24点(SD=0.82)であった。平均超の学校が7校、平均未満の学校が7校であった（1校は利用した教員が1名であったため、除外した。表3参照）。

表2 教員が生徒にSC利用を勧めた際の満足度得点（学校別）

学校	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
X11	14	3	5	4.29	0.83
X8	16	3	5	4.21	0.83
X12	12	3	5	4.07	0.83
X9	15	3	5	4.03	0.69
X5	19	1	5	3.95	1.03
X4	17	3	5	3.92	0.85
X1	10	3	5	3.90	0.74
X6	15	1	5	3.85	0.92
X13	10	2	5	3.80	1.03
X3	16	3	5	3.79	0.75
X10	8	2	5	3.68	1.18
X15	17	2	5	3.58	0.83
X14	12	3	5	3.55	0.69
X2	11	3	5	3.48	0.68
X7	6	1	4	3.08	1.11

表3 教員自身がSCを利用した際の満足度得点（学校別）

学校	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
X14	1	5	5	5.00	
X8	9	4	5	4.72	0.57
X9	8	4	5	4.54	0.50
X10	8	4	5	4.50	0.53
X13	8	4	5	4.42	0.64
X12	10	3	5	4.40	0.70
X3	9	3	5	4.28	0.83
X4	8	4	5	4.28	0.45
X15	5	3	5	4.20	0.84
X5	11	2	5	4.17	1.01
X11	7	1	5	4.14	1.46
X2	5	3	5	4.00	0.71
X1	6	3	5	3.83	0.75
X6	13	1	5	3.73	1.02
X7	3	3	4	3.67	0.58

## 2. 生徒の自由記述回答について

### (1) 学校にSCがいてよかったと思うこと

#### 1) 回答の分析

Q5に対する回答をカードに転記し、「特になし」に類する回答を除いた結果、101枚のカードが作成された。このカードをSC経験がある臨床心理士4名で議論して、類似した内容ごとに分類を行い、いくつかのカテゴリに整理していった。この過程でどのカテゴリにも分類出来なかったものを集めた「その他」は以後の分析から除外することとした。

この結果、90枚のカードを、「相談の効果」(53件)と「息抜き・リラックス」(37件)に分類できた。なお、一人の生徒が両カテゴリともに回答したケースはなかった。得られた2個のカテゴリの特徴や回答例は次の通りであった。

#### 2) 相談の効果

このカテゴリに該当する回答は、回答した生徒自身が、「自分が実際に相談や話をしてみて良かった」「楽になった」など、SCへの相談の結果、情緒的な安定やサポートされた感覚を持てるようになったことや、回答者自身ではないが周りにSCを利用した人がいてその結果が良かったとSCを肯定的にとらえているものであった。

#### 3) 息抜き・リラックス

このカテゴリに該当する回答は、相談室での遊びの内容、「心に余裕ができる」「和む」「行かなくても、行く場所があるってわかるから安心」などSCや相談室の存在が生徒に安心感を与えていること、「ちょっとしたことでもよく聞いてくれる」など、SCとのさりげないふれあいによって喜びや安心感を持っているもの、「SCに声をかけてもらった」など、SCからの何気ない働きかけなどであった。

### (2) SCへの意見について

#### 1) 回答の分析

Q6に対する回答をカードに転記し、SC経験がある臨床心理士4名で議論して、類似した内容ごとに分類を行い、いくつかのカテゴリに整理していった。この結果、「特になし」という回答を除くと96枚のカードが作成され、それぞれを分類・整理したところ、「肯定的な意見」(41件)と「否定的な意見」(48件)に分類できた。このうち、どこにも分類できなかった回答を集めた「その他」(7件)は、以後の分析から除外した。なお、一人の生徒の回答が複数のカテゴリや意見に分類されたケースはなかった。すなわち、生徒の回答には「肯定的な意見」と「否定的な意見」と「その他」のどれか一つに入る意見だけが記述されていた。「肯定的な意見」と「否定的な意見」の特徴や回答例は次の通りであった。

#### 2) 肯定的な意見

このカテゴリの回答は、「先生が学校に来て幸せになれた人がたくさんいると思う」などのSC個人への肯定的評価と、「心が休まる場があるのはすごく良いと思う」などのSC制度を評価するもの、「いつもありがとうございます。先生のその全部包み込んでしまうような雰囲気大好きです。とても感謝しています」などのSC個人への感謝や励ましであった。

#### 3) 否定的な意見

このカテゴリの回答は、「相談室をオープンにして欲しい」「SCがいつ来ているかなどもっと広報して欲しい」「遊びに来る人のせいで相談しにくい」など、SCのアプローチの仕方についての要望、「相談室内の

設備を増やす」「開室日数を増やす」「相談室の場所を変える」「女性がいい」など制度に関する要望、回答者が個人内の葛藤により、まだ相談には行けないという思い、SCがいるのは知っているが、その実態をよく理解できていないというもの、「もう少しやさしくしてほしい」や「話は聞いてくれるけどアドバイスはいまいち」など、SCの人柄ややり方についての否定的な評価などであった。

### 3. 教員自身のSC利用時の満足度と生徒にSC利用を勧める教員の割合との関連

教員自身が利用した際の満足度と、教員が生徒にSC利用を勧めることとの関連を分析するために、満足度得点の平均値4.24以上を高群、4.24未満を低群として $\chi^2$ 検定を行った。この結果、 $\chi^2=0.82$ ,  $df=1$ で $\phi$ 係数が0.086（ともにn.s.）であり、有意な関連は見られなかった（表4参照）。

表4 教員自身のSC利用経験の満足度と生徒にSCを勧めた経験との関連

			生徒にSCを勧めた経験		合計
			有	無	
教員自身のSC利用満足度	低群	人数 %	17 27.9%	44 72.1%	61 100%
	高群	人数 %	10 20.4%	39 79.6%	49 100%
合計		人数 %	27 24.5%	83 75.5%	110 100%

$$\chi^2=0.82, df=1 \text{ n.s.}$$

### 4. 教員が生徒にSC利用を勧めた際の満足度と生徒のSC利用や認知との関連

「1. 学校別のSCを利用した満足度」の結果より、教員がSC利用を生徒に勧めた際の満足度が、15校の教員全体の平均得点より高い7校を高群、低い8校を低群として、教員がSCを生徒に勧めた際の満足度と生徒のSC利用や認知との関連を調べるために $\chi^2$ 検定を行った。具体的な結果は次の通りであった（表5～10参照）。

#### (1) SCの勤務曜日を知っていることとの関連

SCを生徒に勧めた際の教員の満足度と生徒がSCの勤務曜日を知っていることとの関連を探るために $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $\chi^2=0.95$   $df=1$ (n.s.)であり、 $\phi$ 係数が0.045(n.s.)で有意な関連は見られなかった（表5参照）。

#### (2) 相談室来室経験との関連

SCを生徒に勧めた際の教員の満足度と生徒の相談室来室経験との関連を探るために $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $\chi^2=7.98$ ,  $df=1$  ( $p<.01$ )であり、 $\phi$ 係数が0.129 ( $p<.01$ )であった。残差分析の結果から、生徒にSC利用を勧めた際の教員の満足度が低い学校の生徒の方が相談室に行った経験があり、生徒にSC利用を勧めた際の教員の満足度が高い学校の生徒の方が、相談室に行かないことが明らかになった（表6参照）。

#### (3) SCとの相談経験との関連

生徒にSC利用を勧めた際の教員の満足度と生徒のSCとの相談経験との関連を探るために $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $\chi^2=2.71, df=1$ (n.s.)であり、 $\phi$ 係数が $-0.075$ (n.s.)であり、有意な関連は見られなかった(表7参照)。

(4) SCが学校にいた方がよいと思うかどうかとの関連

生徒にSC利用を勧めた際の教員の満足度と、生徒がSCが学校にいた方がよいと思うかどうかとの関連を探るために $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $\chi^2=8.97, df=2$ ( $p<.05$ )であり、クラーメルのVが $.136$ ( $p<.05$ )であった。残差分析の結果から、生徒にSC利用を勧めた際の教員の満足度が低い学校の生徒の方が「いたほうがいい」という回答が少なく、「どちらでもいい」という回答が多かった。一方、生徒にSC利用を勧めた際の教員の満足度が高い学校の生徒の方は、「どちらでもいい」という回答が少なく、「いたほうがいい」という回答が多かった(表8参照)。

(5) SCがいてよかったと思うこととの関連

生徒にSC利用を勧めた際の教員の満足度と生徒がSCがいてよかったと思うこと(「相談の効果」と「息抜き・リラックス」)との関連を探るために、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $\chi^2=0.05, df=1$ (n.s.)であり、 $\phi$ 係数が $-0.023$ (n.s.)で有意な関連は見られなかった(表9参照)。

(6) SCへの意見との関連

生徒にSC利用を勧めた際の教員の満足度と生徒のSCへの意見(「肯定的な意見」と「否定的な意見」)との関連を探るために $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $\chi^2=6.54, df=1$ ( $p<.05$ )であり、 $\phi$ 係数が $-0.271$ ( $p<.05$ )であった。残差分析の結果から、生徒にSC利用を勧めた際の教員の満足度が低い学校の生徒の方が否定的な意見が多く、生徒にSC利用を勧めた際の教員の満足度が高い学校の生徒の方が肯定的な意見が多いことが明らかになった(表10参照)。

(7) まとめ

以上の結果より、生徒にSCを勧めた教員の満足度の高低から生徒のSC利用と認知の関連を見ると、教員の満足度が高い学校では、生徒の相談室来室経験が少なかった。一方、SCが学校にいた方がよいと思う生徒が多く、SCへの意見は肯定的なものが多かった。

表5 教員が生徒にSCを勧めた際の満足度の高低と生徒がSCの勤務曜日を知っていることとの関連

			SCの勤務曜日を知っている		合計
			はい	いいえ	
生徒に勧めた際の満足度割合	低群	人数 %	102 40.6%	149 59.4%	251 100%
	高群	人数 %	82 36.3%	144 63.7%	226 100%
合計		人数 %	184 38.6%	293 61.4%	477 100%

$\chi^2=0.95, df=1$  n.s.

表6 教員が生徒にSCを勧めた際の満足度の高低と生徒が相談室に行ったこととの関連

			相談室に行ったことがある		合計
			はい	いいえ	
生徒に勧めた際の満足度割合	低群	人数	143	110	253
		%	56.5%	43.5%	100%
	調整済み残差		2.8	-2.8	
	高群	人数	99	128	227
%		43.6%	56.4%	100%	
調整済み残差		-2.8	2.8		
合計			242	238	480
			%	49.6%	100%

$$\chi^2=7.98, df=1.p<.01$$

表7 教員が生徒にSCを勧めた際の満足度の高低と生徒がSCに相談した経験との関連

			相談したことがある		合計
			はい	いいえ	
生徒に勧めた際の満足度割合	低群	人数	19	234	253
		%	7.5%	92.5%	100.0%
	高群	人数	27	199	226
		%	11.9%	88.1%	100.0%
合計			46	433	479
			%	90.4%	100.0%

$$\chi^2=2.71, df=1 n.s.$$

表8 教員が生徒にSCを勧めた際の満足度の高低と生徒がSCが学校にいた方がよいと思うこととの関連

			SCが学校にいた方がよいと思う			合計
			いたほうがいい	どちらでもいい	いなくてもいい	
生徒に勧めた際の満足度割合	低群	人数	114	121	17	252
		%	45.2%	48.0%	6.7%	100%
		調整済み残差	-2.9	2.5	1.1	
	高群	人数	131	82	10	223
		%	58.7%	36.8%	4.5%	100%
		調整済み残差	2.9	-2.5	-1.1	
合計			245	203	27	475
			%	42.7%	5.7%	100%

$$\chi^2=8.97, df=2.p<.05$$

表9 教員が生徒にSCを勧めた際の満足度の高低と生徒がSCがいてよかったと思ったこととの関連

			SCがいてよかったこと		合計
			相談の効果	息抜き・リラックス	
生徒に勧めた際の満足度割合	低群	人数	23	16	39
		%	59.0%	41.0%	100%
	高群	人数	30	19	49
		%	61.2%	38.8%	100%
合計			53	35	88
			%	39.8%	100%

$$\chi^2=0.05, df=1 n.s.$$

表10 教員が生徒にSCを勧めた際の満足度の高低と生徒がSCへの意見との関連

			SCへの意見		合計
			肯定的な意見	否定的な意見	
生徒に勧めた際の満足度割合	低群	人数	12	27	39
		%	30.8%	69.2%	100%
	調整済み残差		-2.6	2.6	
	高群	人数	29	21	50
%		58.0%	42.0%	100%	
調整済み残差		2.6	-2.6		
合計		人数	41	48	89
		%	46.1%	53.9%	100%

$$\chi^2=6.54, df=1, p<.05$$

## 5. 教員自身のSC利用時の満足度と生徒のSC利用や認知との関連

「1. 学校別のSCを利用した満足度」の結果より、教員自身のSC利用時の満足度が、15校の教員全体の平均得点より高い7校を高群、低い7校を低群として、教員自身がSC利用時の満足度と生徒のSC利用や理解との関連を調べるために $\chi^2$ 検定を行った。具体的な結果は次の通りであった（表11～表16参照）。

### (1) SCの勤務曜日を知っていることとの関連

SCを利用した教員自身の満足度と生徒がSCの勤務曜日を知っていることとの関連を探るために $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $\chi^2=4.81, df=1(p<.05)$ であり、 $\phi$ 係数が.103( $p<.05$ )であった。残差分析の結果から、SCを利用した教員自身の満足度が低い学校の方が、生徒がSCの勤務曜日を知っていると答えた割合が高かった（表11参照）。

### (2) 相談室来室経験との関連

SCを利用した教員自身の満足度と生徒の相談室来室経験との関連を探るために $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $\chi^2=22.02, df=1(p<.001)$ であり、 $\phi$ 係数が.220( $p<.001$ )であった。残差分析の結果から、SCを利用した教員自身の満足度が低い学校の生徒の方が相談室に行ったことがあり、SCを利用した教員自身の満足度が高い学校の生徒の方が相談室に行かないことが明らかになった（表12参照）。

### (3) SCとの相談経験との関連

SCを利用した教員自身の満足度と生徒のSCとの相談経験との関連を探るために $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $\chi^2=9.38, df=1(p<.01)$ であり、 $\phi$ 係数が.144( $p<.01$ )であった。残差分析の結果から、SCを利用した教員自身の満足度が低い学校の生徒の方がSCに相談に行くことが明らかになった（表13参照）。

### (4) SCが学校にいた方がよいと思うかどうかとの関連

SCを利用した教員自身の満足度と生徒がSCが学校にいた方がよいと思うかどうかとの関連を探るために $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $\chi^2=0.36, df=2(n.s.)$ であり、クラーメルのVが.028(n.s.)であり、有意な関連は見られなかった（表14参照）。

### (5) SCがいてよかったと思うこととの関連

SCを利用した教員自身の満足度とSCがいてよかったと思うこと（「相談の効果」と「息抜き・リラックス」）との関連を探るために、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $\chi^2=8.03$ ,  $df=1$  ( $p<.01$ ) であり、 $\phi$ 係数が.307 ( $p<.01$ ) であった。残差分析の結果から、SCを利用した教員自身の満足度が低い学校の生徒の方が「相談の効果」が多く、生徒にSC利用を勧めた際の教員の満足度が高い学校の生徒の方が「息抜き・リラックス」が多いことが明らかになった（表15参照）。

#### (6) SCへの意見との関連

SCを利用した教員自身の満足度と生徒のSCへの意見（「肯定的な意見」と「否定的な意見」）との関連を探るために $\chi^2$ 検定を行ったところ、 $\chi^2=0.60$ ,  $df=1$  (n.s.) であり、 $\phi$ 係数が.084 (n.s.) であり、有意な関連は見られなかった（表16参照）。

#### (7) まとめ

以上の結果より、SCを利用した教員自身の満足度の高低から中学生のSC認知度と利用状況を見ると、教員の満足度が高い学校では、SCの勤務曜日を知っている生徒が少なく、相談室来室経験と相談経験も少なかった。一方、教員の満足度が低い学校では、SCが学校にいて良かったこととして、「相談の効果」を挙げる生徒が多く、「息抜き・リラックス」を挙げる生徒は少なかった。

表11 教員自身のSC利用時の満足度の高低と生徒がSCの勤務曜日を知っていることとの関連

			SCの勤務曜日を知っている		合計
			はい	いいえ	
教員自身のSC利用時の満足度	低群	人数	99	123	222
		%	44.6%	55.4%	100%
		調整済み残差	2.2	-2.2	
	高群	人数	79	150	229
		%	34.5%	65.5%	100%
		調整済み残差	-2.2	2.2	
合計		人数	178	273	451
		%	39.5%	60.5%	100%

$$\chi^2=4.81, df=1, p<.05$$

表12 教員自身のSC利用時の満足度の高低と生徒が相談室に行ったこととの関連

			相談室に行ったことがある		合計
			はい	いいえ	
教員自身のSC利用時の満足度	低群	人数	137	88	225
		%	60.9%	39.1%	100%
		調整済み残差	4.7	-4.7	
	高群	人数	89	140	229
		%	38.9%	61.1%	100%
		調整済み残差	-4.7	4.7	
合計		人数	226	228	454
		%	49.8%	50.2%	100%

$$\chi^2=22.02, df=1, p<.001$$

表13 教員自身のSC利用時の満足度の高低と生徒がSCに相談した経験との関連

			相談したことがある		合計
			はい	いいえ	
教員自身のSC利用時の満足度	低群	人数	32	192	224
		%	14.3%	85.7%	100%
		調整済み残差	3.1	-3.1	
	高群	人数	13	216	229
		%	5.7%	94.3%	100%
		調整済み残差	-3.1	3.1	
合計		人数	45	408	453
		%	9.9%	90.1%	100%

$$\chi^2=9.38, df=1, p<.01$$

表14 教員自身のSC利用時の満足度の高低と生徒がSCが学校にいた方がいいと思うこととの関連

			SCが学校にいた方がいいと思う			合計
			いたほうがいい	どちらでもいい	いなくてもいい	
教員自身のSC利用時の満足度	低群	人数	115	96	12	223
		%	51.6%	43.0%	5.4%	100%
		調整済み残差				
	高群	人数	122	91	13	226
		%	54.0%	40.3%	5.8%	100%
		調整済み残差				
合計		人数	237	187	25	449
		%	52.8%	41.6%	5.6%	100%

$$\chi^2=0.36, df=2 \text{ n.s.}$$

表15 教員自身のSC利用時の満足度の高低と生徒がSCがいてよかったこととの関連

			SCがいてよかったこと		合計
			相談の効果	息抜き・リラックス	
教員自身のSC利用時の満足度	低群	人数	38	13	51
		%	74.5%	25.5%	100%
		調整済み残差	2.8	-2.8	
	高群	人数	15	19	34
		%	44.1%	55.9%	100%
		調整済み残差	-2.8	2.8	
合計		人数	53	32	85
		%	62.4%	37.6%	100%

$$\chi^2=8.03, df=1, p<.01$$

表16 教員自身のSC利用時の満足度の高低と生徒のSCへの意見との関連

			SCへの意見		合計
			肯定的な意見	否定的な意見	
教員自身のSC利用時の満足度	低群	人数	23	21	44
		%	52.3%	47.7%	100%
		調整済み残差			
	高群	人数	18	23	41
		%	43.9%	56.1%	100%
		調整済み残差			
合計		人数	41	44	85
		%	48.2%	51.8%	100%

$$\chi^2=0.60, df=1 \text{ n.s.}$$

## 6. 学校条件の影響について

本研究において、教員が生徒に利用を勧めることと自身が利用すること、および教員が生徒に勧めた際の満足度と教員自身が利用した際の満足度の割合や得点が高い学校群ほど、中学生のSC認知度や利用経験が低いという結果は、概ね共通していた。この結果から、高群と低群に入った学校に何らかの共通点があるかどうかを確認することが必要と考え、まず、教職員の配置状況やクラス規模等の学校ごとの条件が、結果に与える影響から検討した。

教職員の配置状況については、学校規模により人数に違いはあるが、教務主任や生徒指導専任教員等の職掌の種類は同じであった。そして、SCは「Ⅲ. 方法」で述べたとおり、15校全てで週に2回ほぼ同じ時間数配置されていた。また、SC以外の相談を担当するスタッフ、例えば心の相談員やボランティア相談員などは、いずれの学校でも配置されていなかった。つまり、相談に関わる人員の差異が、結果に影響を与えていることは考えられなかった。

次に、教員が生徒に利用を勧めることと教員自身が利用すること、および教員が生徒に勧めた際の満足度と教員自身が利用した際の満足度の高群および低群に同じ学校が入っている可能性について、表17をもとにケンドールの順位相関係数を算出して検討した。この結果は次の通りであった。

第一に、生徒にSCを勧めた教員の割合と教員が生徒にSC利用を勧めた際の満足度とでは、 $\tau=0.01$ であり有意ではなかった。

第二に、生徒にSCを勧めた教員の割合と教員自身がSC利用時の満足度とでは、 $\tau=-0.01$ であり有意ではなかった。

第三に、教員自身のSC利用割合と教員が生徒にSC利用を勧めた際の満足度とでは、 $\tau=0.28$ であり有意ではなかった。

第四に、教員自身のSC利用割合と教員自身がSC利用時の満足度とでは、 $\tau=0.22$ であり有意ではなかった。

第五に、教員が生徒にSC利用を勧めた際の満足度と教員自身がSC利用時の満足度とでは、 $\tau=0.03$ であり有意ではなかった。

以上の結果より、いずれの数値も有意ではなく、各要因の高群および低群に同じ学校が入っている可能性は低いものと見なせる（表18参照）。

また、一クラスあたりの人数による違いも、一学年に1あるいは2クラスしかないX7とX14を除いて、大きな違いは見られなかった（前掲の表1参照）。

最後に、学校全体のクラス数が9クラス以下の学校5校を小規模校、クラス数が15クラス以上の学校5校を大規模校として、教員が生徒に利用を勧めること、教員自身が利用すること、教員が生徒に勧めた際の満足度、教員自身が利用した際の満足度の4つの要因と、学校規模との関連を検討した。

第一に、生徒にSC利用を勧めた際の満足度では、小規模校5校の平均は3.54(SD=0.29)、大規模校5校の平均は4.05(SD=0.18)で、 $t(8)=-3.33(p<.05)$ で有意差が見られた。

第二に、教員自身が利用した際の満足度では、小規模校4校の平均は4.09(SD=0.33)、大規模校5校の平均は4.22(SD=0.32)で、 $t(7)=-0.62$ で有意差は見られなかった。

以上の結果を踏まえて、各要因全体の傾向や、学校条件の影響を離れた各要因個別の事情を考察する。

表17 各校の4つの要因の高群と低群

学校	学校規模	生徒にSCを勧めた教員の割合(順位)	教員自身のSC利用割合(順位)	教員が生徒にSC利用を勧めた際の満足度(順位)	教員自身がSCを利用した際の満足度(順位)
X1	大	47.6%(12)	26.1%(11)	3.90(6)	3.83(12)
X2	小	66.7%(2)	31.3%(9)	3.48(13)	4.00(11)
X3	小	66.7%(2)	37.5%(4)	3.79(9)	4.28(7)
X4	大	60.6%(8)	24.2%(12)	3.92(5)	4.28(6)
X5	大	77.8%(1)	40.7%(1)	3.95(4)	4.17(9)
X6	中	43.2%(14)	35.1%(5)	3.85(7)	3.73(13)
X7	小	46.2%(13)	23.1%(13)	3.08(14)	3.67(14)
X8	大	58.6%(9)	34.5%(6)	4.21(2)	4.72(1)
X9	中	64.0%(6)	32.0%(8)	2.03(15)	4.54(2)
X10	中	38.1%(15)	33.3%(7)	3.68(10)	4.50(3)
X11	大	60.9%(7)	30.4%(10)	4.29(1)	4.14(10)
X12	中	56.0%(10)	40.0%(2)	4.07(3)	4.40(5)
X13	小	50.0%(11)	38.1%(3)	3.80(8)	4.42(4)
X14	小	65.0%(5)	5.0%(15)	3.55(12)	(除外)
X15	中	65.4%(4)	19.2%(14)	3.58(11)	4.20(8)

注) 学校規模: 小=9クラス以下。中=10~14クラス。大=15クラス以上

表18 4つの要因の教員が在籍する割合が高い学校と低い学校

学校規模	生徒にSCを勧めた教員の割合	教員自身のSC利用割合	教員が生徒にSC利用を勧めた際の満足度	教員自身がSCを利用した際の満足度
低い学校	X1	X1	X2	X1
	X6	X2	X3	X2
	X7	X4	X7	X5
	X8	X7	X9	X6
	X10	X11	X10	X7
	X12	X14	X14	X11
高い学校	X13	X15	X15	
	X2	X3	X1	X3
	X3	X5	X4	X4
	X4	X6	X5	X8
	X5	X8	X6	X9
	X9	X9	X8	X10
	X11	X10	X11	X12
	X14	X12	X12	X13
	X15	X13	X13	X15

## V. 考察

### 1. 教員が生徒にSC利用を勧めた際の満足度との関連

生徒にSC利用を勧めた教員の満足度から生徒のSC利用と認知を見ると、教員の満足度が高い学校では、生徒の相談室来室経験が少なかった。また、SCが学校にいた方が良いと思う生徒が多く、SCへの意見は肯定的なものが多かった。このような、教員の満足度が高いほど、生徒のSCへの意見が肯定的になっていたという結果は、友人のSCへの援助要請態度と自分自身の援助要請態度との間に正の関連があることを述べた石川・橋本<sup>5)</sup>の結果のように、教員が生徒にSCを勧めた結果に満足している、つまり教員がSCの活動に満足していることが、生徒のSCへの見方を肯定的にしていることを示しているのではないかと考えられる。

一方、生徒の来室経験が少ないのに、勧めた教員が満足しているということは、個別面接が多く、1回の勤務で対応できる生徒の数が少ない可能性が推測される。その場合には、休み時間や放課後に教員との情報交換を頻繁にしている可能性もあるのではないかと考えられる。勧めた際の満足度を高める要因として、紹介された生徒の面接状況などについてSCから教員によく伝えていることもあると考える。

### 2. 教員自身がSC利用時の満足度との関連

教員自身がSCを利用した場合の満足度から生徒のSC利用と認知を見ると、教員の満足度が高い学校では、SCの勤務曜日を知っている生徒が少なく、相談室来室経験と相談経験も少なかった。一方、SCが学校にいて良かったこととして、「息抜き・リラックス」を挙げる生徒が多かった。

この結果からは、教員がSC利用に満足できている状況では、教員とのコンサルテーションやケース会議へのSCの参加などにより、教員の利用でSCの勤務時間の多くが埋まっており、生徒のSC利用が相対的に少なくなっているのではないかと考えられる。

一方、教員の満足度が高い学校で、SCが学校にいて良かったこととして、生徒が「息抜き・リラックス」を挙げている点からは、生徒の利用を個別相談という形式に限らず、単発の飛び込み来室を受け入れて、生徒のストレス解消に寄与するという柔軟な対応をしていることが評価されている可能性も推測され

る。これらの点に関しては、今後の更なる検討が必要である。

### 3. 学校条件の影響

学校規模と生徒にSCを勧めた際の教員の満足度との関連を検討した結果、生徒に勧めた際の満足度は、大規模校の方が高かった。これは、大規模校ほど生徒指導上の問題が起こった際に教職員の人手が足りないことと関係すると考えられる。例えば、非行傾向がある生徒への対応に学年教員が労力を費やすと、一般的な友人関係の問題やおとなしい生徒の不登校や学業不振等に教員の手が回らなくなることから、SCに対応を依頼するケースが多くなると考えられる。そのような場合、教員自身の手が回らなかった部分にSCが対応してくれたというだけでも、満足される可能性があるのではないかと考えられる。つまり、大規模校ほど生徒指導上の問題が起こりやすく、それを予防するために管理的な学校風土になりがちであるが、そのような学校風土の中で埋もれがちな問題に個別に丁寧に対応できるSCの対応力が評価されたのではないかと考える。新井<sup>7)</sup>では、小規模校ほど教員の負担が大きいと指摘しているが、同時に学校が抱える問題の質と量も負担に影響していると述べていたことと合致する結果ではないかと考えられる。

### 4. 総合的考察

教員自身がSCを利用した結果に満足している学校では、SCを生徒のみが利用するものと限定して考えておらず、教員たちが活用できている現状に満足しているのではないかと考えられる。

現状ではSCの勤務日数や時間が、概ね週1回8時間程度に限られているため、教員の対応によって生徒がSCを肯定的にとらえても、SCの利用件数の増加につながるとは限らない。勤務している学校がどのような状況にあるか、児童生徒、教職員、あるいは保護者という構成員個々について、および学校という集団全体について適切に見立てる能力を持って、生徒への支援と教員へのコンサルテーションのバランスをとることが、SC活動をより効果的にすることにつながるのではないかと考えられる。

## VI. 文献

- 1) 木村真人 (2006) 学生相談利用の勧めが被援助志向性に及ぼす影響－自尊感情、援助不安、学内支援者の観点から－. Campus Health. 43(2), 113-118.
- 2) 鶴養啓子 (2007) 教員との連携, 村山正治編 学校臨床のヒント－SCのための73のキーワード－, 金剛出版, 東京, 197-199.
- 3) 吉澤佳代子・古橋啓介 (2009) 中学校におけるスクールカウンセラーの活動に対する教師の評価. 福岡県立大学人間科学部紀要.17(2), 47-65.
- 4) 橋本和幸・倉橋朋子・上野道子ほか (2016) 全校配置期におけるスクールカウンセラーについて, 公立中学校教員の利用状況と生徒の認知および利用との関連. 了徳寺大学研究紀要. 10, 147-161.
- 5) 石川裕希・橋本剛 (2011) 中高生のスクールカウンセラーへの援助要請態度に及ぼす友人の影響. 東海心理学研究.5, 15-25.
- 6) 中村恵子・小玉正博・田上不二夫 (2013) 教育委員会に所属する学校カウンセラーの介入が不登校生徒への校内支援体制に及ぼす影響. カウンセリング研究.46, 43-52.
- 7) 新井肇 (1999) 「教師」崩壊－バーンアウト症候群克服のために－, すずさわ書店, 埼玉.

(平成28年11月30日稿)

査読終了日 平成28年12月15日